『西南アジア研究』No. 74, 2011

オスマーン朝のハーカーンたち

井　谷　鋼　造

は　じ　め　に

現代のトルコ共和国イスタンブル市内の旧市街，観光名所であるアヤ・ソフヤ大聖堂敷地の東北隅，トプカプ宮殿博物館への入口にバーブ・フマーユーンと呼ばれる城門があり，アーチ型をした開口部の上方に日本語訳すれば，次のような内容の石板銘文（能書家アリー・ブン・スーフィーの作品）が掲げられている。（以下，刻銘文資料訳文中の（　）は原文を補足したこと，【　】は原語のカタカナ表記を，＿＿＿は固有名詞，- - - - -はその修飾語，……は讃辞を示している。）

> これは，二つの陸のスルターン，二つの海のハーカーン，人とジンの両界における神の影，東西の間において神を助ける者，水と泥の英雄，クスタンティーンの城塞の征服者【ファーティフ】，アブルファトフ・スルターン・ムハンマド・ハーン・ブン・スルターン・ムラード・ハーン・ビン・スルターン・ムハンマド・ハーン ―― 至高なる神が彼の権力を永遠ならしめ，彼の位置を二つの指極星の頂へと高めるように ―― の命令で，883年の祝福されたラマダーン月に，その建設が神の後援と是認の上で基礎づけられ，その柱石が神の安全と保護の確保によって打ち固められた，祝福されたる城塞である。［井谷 2005A：2銘文］

この銘文は883年ラマダーン月（1478年11/12月）にイスタンブルの征服者である，オスマーン朝のスルターン，ムハンマド2世の命令によって城塞（現在のトプカプ宮殿）が建設された際に付されたもので，銘文中「スルターン・ムハンマド・ハーン」には「二つの陸のスルターン，二つの海のハーカーン」（سلطان البرين وخاقان البحرين）という称号が付けられている。ハーカーン（khāqān）という称号が用いられたオスマーン朝時代の銘文は決して珍しいものではなく，ムラード1世の時代（1362-89）以来，この10年ほど筆者が調べただけでも16例が知られている[1)]。石板などの銘文だけではなく，貨幣銘文や写本上でのオスマーン朝の支配者たちの称号としてもスルターンとハーカーンが併記される例は少なくない。例えば，上記のスルターン，ムハンマド2世時代の歴史を書き残したトゥルス

1）既発表のものとして上掲の他に井谷 2005A：1銘文，井谷 2007：⑥，⑦，⑩銘文，井谷 2008B：4-⑤銘文，井谷 2008A：⑥，⑥b銘文，井谷 2009：⑤，⑦銘文，井谷 2011：B-②，③，⑥銘文がある。これらには，ハーカーンの複数形（خواقين）という表現をもつ銘文を含めている。

ン・ベグ（Ṭūrsūn Beg）はその著作『アブルファトフ史』*Tārīkh-i Abū al-Fatḥ*（1488年以後に執筆・献呈されたもの）の写本中でムハンマド2世を「二つの陸のスルターン，二つの海のハーカーン，信者たちの長，異教徒と多神教徒を従わせる者」と呼んでいるし［TA：25b］，ムハンマドの後継者となったバーヤズィード2世について，「正当な権利を有するスルターンたちのスルターン，絶対的なハーカーンたちのハーカーン」（سلطان السلاطين بالاستحقاق خاقان الخواقين على الاطلاق）と形容している［TA：164a］。また，スライマーン大帝に献呈された挿絵付ペルシア語韻文によるオスマーン朝史第5巻は『スライマーン・ナーメ』*Sulaymān-nāma*[2]の名で知られるが，トプカプ宮殿博物館に所蔵される写本（Hazine 1517）の扉頁シャムサには「スルターンの子のスルターン，ハーカーンの子のハーカーン（سلطان بن السلطان خاقان بن الخاقان），スルターン，スライマーン・シャーフ・ハーン……の書庫への贈り物」との献辞が見られる［SN：54］。これらの例からも，オスマーン朝の支配者たちが11～13世紀のセルジュク朝の支配者たちが用いたのと同じ「スルターン」という称号に加えて，セルジュク朝の支配者たちが全く使用することのなかった「ハーカーン」という称号をも銘文や史料上の表現として用いていたことは明らかであり，それが用いられるに至った背景を，「ハーカーン」という言葉のアラビア語，ペルシア語，トゥルク語で書き残された諸資料上の使用例を検討しながら，歴史的に考察することが本稿の目的である。

I　ハーカーンの語義と研究史

ハーカーンの語義の説明をする上で基本的な情報を提供するのは，*Encyclopaedia of Islam* の旧版（1913-1938）の簡潔にまとめられた“khāḳān”の項目を執筆したW. Bartholdがすでに紹介している有名なアラビア語の史料中の記事である。それはフワーラズミー（Abū ʻAbd Allāh Muḥammad b. Aḥmad al-Khwārazmī）の著作『諸学の鍵』*Mafātīḥ al-ʻUlūm* であり，著者フワーラズミーはサーマーン朝のワズィール，ウトビー（Abū al-Ḥasan ʻUbayd Allāh b. Aḥmad al-ʻUtbī, 982年以後に没）にこの作品を献呈しているので，10世紀後半に書かれたものであることに間違いない。この作品中の説明によれば，

> ハーカーン（خاقان）はトゥルクの最大の王である。ハーン（خان）は首領であり，ハーカーンはハーンのハーン，つまり首領たちの首領である。ペルシア人（الفرس）がシャーハーンシャーフ（شاهانشاه）と言うがごとく。［MU：120］

である。さらに11世紀後半のバグダードでトゥルク人の王族出身であるマフムード・カーシュガリー（Maḥmūd al-Kāshgharī）によって書かれ，アッバース朝のハリーファ，ムク

2）『スライマーン・ナーメ』の著者はFatḥ Allāh ʻĀrif Chelebī（ʻĀrifī）であり，完成は965年ラマダーン月中旬（1558年6-7月）である。

タディー（在位 1075-94）に献呈された著作『トゥルク諸語集成』*Dīwān Lughāt al-Turk*[3] に次のような説明がある。

ハーンは最大の王のことである。アフラースィヤーブの子孫がそう名付けられ，それはハーカーンのことである。[DLT：513]

アフラースィヤーブとはイーラーンに対抗するトゥーラーンの伝説上の王であり，この場合その子孫はトゥルキスターンのカラハン朝を指している。また別のいくつかの個所でカーシュガリーはカラハン朝のことを「ハーカーニーヤ」（الخاقانية）と呼んでいる［DLT：179, 180, 180, 183, 208, 222］。

このふたつの説明により，ハーカーンとはペルシア語の「シャーハーンシャーフ」（王中の王）に当たるトゥルクの最大の王のことであり，カーシュガリーが生きていた 11 世紀には特にカラハン朝のことを指していたことが分かる。

この両者よりもさらに古い時代，アッバース朝時代にバグダードやサーマッラーで駅逓長官を務めたイブン・フルダーズビフ（Abū al-Qāsim ʻUbayd Allāh b. ʻAbd Allāh ibn Khurdādhbih 911 年没）はその著作『諸国と諸道』*al-Masālik wa al-Mamālik* の中で「トゥルク，タッバト，ハザルの王たちはどれもハーカーンである。ハルルフ（الخرلخ）の王だけはジャブグーヤ（جبغوية）と呼ばれるのを除いて」［MM：16］と述べており，以上の 3 例からハーカーンがトゥルクの王の称号であったことは異論がないであろう。

さて，アラビア文字で表記されるハーカーンの語義は以上のように説明されており，また以下でもその使用例を史料上に追跡していくのだが，ハーカーンの語が元来北アジアの遊牧民族であった鮮卑，柔然，突厥，回紇（回鶻）などの諸民族の中で君主の称号，「カガン」（Qaγan）として用いられてきたことはよく知られている。すでに白鳥庫吉，内田吟風，護雅夫，町田隆吉などの諸氏により主として漢文史料に基づく可汗（可寒）称号の研究がなされ，梅村坦氏によってそれらは「草原における可汗称号のひろがり」として要領よく整理されている［梅村 1999, 86-95］。それによれば，可汗という称号は鮮卑・拓跋部に始まり，鮮卑・拓跋部が建てた北魏に対抗して柔然の支配者（社崙）が 402 年に可汗を自称するようになり，その後柔然を滅ぼした突厥，次いで突厥の滅亡後はウイグル（回紇），その瓦解後は西遷した天山ウイグル王国の支配者たちによっても使用され続けたという。さらに北アジアでは，契丹（遼）や女真（金）においても称号の使用が継承され，13 世紀に入るとモンゴルの支配者チンギズ・ハーンの子孫たちによってこの称号が受け継がれて，ウゲデイ以後は「カーアーン」（Qā'ān）という表記が現れてくることもよく知られている［杉山 1997A：107-11；杉山 1997B：215-7］。

3） 現存唯一の写本によれば，原著の完成は 466 年ジュマーダーⅡ月 10 日（1074. 2. 10.），写本自体の完成は 664 年シャッワール月 27 日（1266. 8. 1.）である［DLT：628］。間野英二氏は英訳を出版した Robert Dankoff の所説に基づき 466 年を 469 年の誤記として西暦 1077 年完成としており，これに従う［間野 1992］。

こうしたハーカーン（可汗）称号使用の広がりの中で，オスマーン朝支配者たちのハーカーン称号使用例はどのような由来や背景をもって出現するのであろうか。ヨーロッパでは歴史的に「オスマーン・トルコ」と通称されるように，王朝の支配者であったオスマーン家は明らかにトルコ（トゥルク）系民族の出身であり，オスマーン朝がトゥルクの伝統的な支配者の称号であったハーカーンという語を用いたのは当然のことであると考えられたかもしれない。そのためか，ハーカーンというオスマーン朝支配者の称号の一つに関して，これまでも上述のバルトリドが執筆した語義に関する『イスラーム百科事典』（旧版）の項目や後述する Gerhard Doerfer による詳細な語義の説明と諸資料中のハーカーン（ハーン）の語の使用例（オスマーン朝期の例は含まれていない）列挙以上の詳しい検討がなされることがなかったのである。オスマーン朝時代については，僅かに Paul Wittek が古文書上のスルターンたちのトゥグラー（Ṭughrā 花押様の署名）研究を基にムラード1世時代からのハーンという称号の導入に触れている程度である［Wittek 1950, 279-92］。また，第一次大戦後オスマーン朝国家が解体に瀕した際に「解放戦争」を経て建国された現在の国民国家たるトルコ共和国においても，オスマーン朝時代にそれまでのイスラーム諸国家において政治的な支配者の称号として用いられてきたスルターンと並んで，ハーカーンという称号が用いられ始めた歴史的な経緯や由来を，改めて詳しく検討した研究は見られない。

しかし，史料の欠如のために成立当初の実態には不明な点が多くあるとはいえ，国家としての特質は何よりもイスラーム国家であったオスマーン朝自体が文書や銘文，貨幣上などで公式にその国家基盤としたトゥルク（トルコ）[4] という民族名を使用したことはなく，「オスマーン朝=トルコ国家」という等式は歴史の実態から見ても成り立たない。上述のごとく，オスマーン朝に先立って西アジアに覇権を打ち立てたセルジュク朝国家の支配者たちは，トゥルク系オグズ=トゥルクマーンの出身であったにもかかわらずハーカーンという称号を用いた形跡がないし，支配者の称号であったスルターンと並置的に用いられた称号はペルシア語の「シャーハンシャーフ」に限られていたのである[5]。

以下では，西暦7世紀以降の西アジアにおける主要な文献言語であった，アラビア文字を使用するアラビア語，ペルシア語，トゥルク語の史料に拠って，ハーカーンという語の使用例やその歴史的な背景を考察してみたい。

4）本稿で筆者は「トゥルク」の語をトゥルク（テュルク）系民族の総称として用い，それに対して「トルコ」は現在のトルコ共和国とその国民の呼称として用いる。

5）これまでに筆者が調査・解読してきた結果によれば，ルーム・セルジュク朝時代の支配者たちがスルターンと併称して「シャーハンシャーフ」を使用した例は26回（既発表は井谷2005B：①，②，③銘文，井谷2008B：2-①，④，⑤銘文），カラマン・ベイリクの支配者による同様の使用例は2回（井谷2005B：⑧銘文，井谷2011：E-②銘文），オスマーン朝の支配者による同様の使用例は2回（井谷2007：⑤銘文，井谷2010：④銘文）ある。

Ⅱ　西暦10世紀までのムスリム史料に見えるハーカーンの使用例

アラビア語，ペルシア語をはじめとする諸言語資料中に見られるハーカーンという語の語義及びその使用例を最も詳しくまた網羅的に挙げたものは，先に名を挙げたデルファーによる研究であろう［Doerfer 1967］[6)]。上で語義の説明に引用したイブン・フルダーズビフ，フワーラズミー，カーシュガリーの記録もその中に含まれている。デルファーの引用例と一部は重複するが，以下，筆者の集めたムスリム史料中に見えるハーカーンという語の使用例を時代順に挙げてみたい。

まずは，初期イスラーム時代に関する最重要な史料の一つタバリー（Abū Ja'far Muḥammad b. Jarīr al-Ṭabarī, 923年没）の『歴史』*Ta'rīkh al-Rusul wa al-Mulūk* 中に現れる使用例について挙げると，最も早くハーカーンの名が史料上に現れるのは，サーサーン朝の王バフラーム・ジュール（Bahrām Jūr）の事績に関してである。それによれば，バフラームが快楽に耽って政治を顧みず，庶民の非難が高まった際に最初に現れた外敵が「トゥルクの王ハーカーン」（خاقان ملك الترك）であり，彼は25万のトゥルクを率いて遠征して来たという。バフラームはアーザルバイジャーンの拝火殿に隠遁すると称して出奔したが，人々はそれを敵からの逃亡，王権の放棄と信じて疑わなかった。圧倒的なハーカーンの勢力に恐れをなした人々はハーカーンとの交渉に入り，ハラージュ（地租）の確定を相談し，ハーカーンは軍を休止させた。この機に乗じて，バフラームはハーカーンの状況を知り，少数の配下を率いて夜襲をかけ，手ずからハーカーンを討ち取り，その王冠と領土を手に入れ，多くの戦利品を得たという［TRM Ⅰ：863-4］。

この記事に現れる「トゥルクの王ハーカーン」については，既に榎一雄氏がエフタルではなく，キダーラ王朝のことかと推定していたが［榎 1951：144-9］，キダーラがフンを自称し，バクトリア語を公用語としていたという吉田豊氏の最新の指摘に従えば，キダーラをトゥルクと解釈するには無理がある［吉田 2011：22-3］。それゆえこの記事の「トゥルク」の意味する内容については不明な点があるにせよ，サーサーン朝バフラーム・ジュール（ワフラーム・ゴール）の治世（420-38）の記事に早くもハーカーンの名が現れることは確実で，ハーカーンとの戦いとその勝利は，バフラームの大武勲としてタバリーの中にも記録されたのである。

バフラームの孫，フィールーズ（Fīrūz）は兄弟フルムズ（Hurmuz）に対抗してトゥハーリスターンの「ハヤーティラ」（al-Hayāṭila）に援助を求め，その援軍により王位を得

6）Doerfer 1967の項目番号1160 "khāqān"，及び1161 "khān" の項目はSS. 141-179に及び，これら両語の使用例を現代に至る諸言語資料中に博捜しているが，突厥文字碑文やカーシュガリーの『トゥルク諸語集成』，『クタドグ・ビリグ』などを除いてオスマーン朝時代のトゥルク語文献は引用されておらず，ハーカーンの称号がオスマーン朝で使用された理由や背景については全く説明がない。

たが，後に彼らとの戦いによって4人の息子，4人の兄弟共々殺されたという［TRM Ⅰ：872-3］。ここに出てくる「ハヤーティラ」とはいわゆるエフタルのことであるが，タバリーの記述には，エフタルの王がハーカーンと呼ばれている例はない。フィールーズの後，その子クバーズ（Qubādh）は兄弟のBalāshに対抗するために「トゥルクの王ハーカーン」に援助を求めてハーカーンの許へ逃亡し，4年間留まり，クバーズはハーカーンの援助を得て王位を確保したという［TRM Ⅰ：882-4］。さらにクバーズの子キスラー（Kisrā Anūsharwān）の時代「スィンジブー・ハーカーン」（سنجبوا خاقان）という人物がいたが，彼はトゥルクの中で最強，最も勇敢で，威厳があり，最多の軍勢を有し，ハヤーティラを怖れず，彼らの王であった（ورز）を殺し，彼らの財を戦利品とし，彼らの領土をキスラーと分け合った人物であるという［TRM Ⅰ：895］。タバリーの記録の中でハーカーンの固有名が知られるのはこの一例だけであり，「スィンジブー・ハーカーン」とは西突厥のイステミ（室點蜜）カガンを指していると考えられる［内藤 1988：385］。タバリーの別の記録では，キスラーはハーカーンと姻戚関係を結んだとされ，これを利用してハーカーンにハヤーティラ挟撃を誘って成功し，またキスラーの後継者フルムズの母は大ハーカーンの娘であったという[7]［TRM Ⅰ：899，966，988］。

これらの記述からは，フィールーズ（ペーローズ，在位459-484），クバーズ（カワード，在位488-497，499-531），キスラー（ホスロウ，在位531-579）の3代にわたりサーサーン朝の王たちは東方のハヤーティラやトゥルクとの外交関係に苦心し，トゥルクとの姻戚関係を通じた連携によりハヤーティラ挟撃に成功して漸く東方からの脅威からひとまずは解放されたようである。上述のような歴史的諸事件の中でトゥルクの王ハーカーンが果たした役割は大きく，彼らの援助がなければ，サーサーン朝の王たちが王位を確保することも，ハヤーティラを挟撃することもかなわなかったのである。

イスラーム時代に入り，ヒジュラ暦22年（642/3）のタバリーの記事には，サーサーン朝最後の王ヤズダジルド（Yazdajird）を追跡したal-Aḥnaf b. Qaysのホラーサーン遠征の話が載せられているが，それによれば，ヤズダジルドは援助を求めてハーカーンとソグド（al-Ṣughd）の王，さらにはスィーン（al-Ṣīn）の王にまで手紙を送り，その後ヤズダジルドがバルフを経てアム河を渡り，敗走してくるとハーカーンは彼を援助して共に渡河し，バルフ方面に留まったという［TRM Ⅰ：2683，2685-8］。この記事は内容から見てヒジュラ22年のものとは受け入れがたいが，サーサーン朝の末期に至ってもハーカーンの援助が求められていたことを示している［稲葉 1995：87-94］。

ウマイヤ朝時代のヒジュラ暦102年から120年にかけて（720-38）の特にマーワラーアンナフルやホラーサーン東部に関する諸事件を扱ったタバリーの記事には「トゥルクのハー

7） フワーラズミーもキスラーの子フルムズの綽名は“Turk-zād”であり，それは「トゥルク女の息子」という意味で，彼の母が「トゥルク王ハーカーン」の娘であったからである，と同様の説明を行なっている［MU：104］。

カーン」（خاقان الترك）や「トゥルク・ハーカーン」（ترك خاقان）「トゥルクの主ハーカーン」（خاقان صاحب الترك）及び単に「ハーカーン」という表現が頻出する［TRM Ⅱ：1413-1637］。これらはH. A. R. Gibbが既に詳しく論じたように，当時のマーワラーアンナフルに頻りに軍事介入してはウマイヤ朝のアラブ・ムスリム軍にしばしば苦杯を喫せしめ，サマルカンド領主グーラク（Ghūrak）などのソグドの領主，君侯と連携していた突騎施=トュルキシュ（Türkish）の首領，蘇禄（738年没）を指すことは明らかである［Gibb 1923，59-87］。アラブの文人ジャーヒズ（Abū ʻUthmān ʻAmr b. Baḥr al-Jāḥiẓ al-Baṣrī, 869年没）は『ヒラーファの軍の美徳とトゥルク人たちの長所に関する，ファトフ・ブン・ハーカーン（Fatḥ b. Khāqān）[8] への書簡』という著作の中で，ホラーサーン総督のジュナイド（Junayd b. ʻAbd al-Raḥmān al-Murrī）[9] が「トゥルクの王ハーカーン」と対戦した際にその求めに応じて一対一で会談したことが伝えられ，ジュナイドは「彼（ハーカーン）ほど誠実で，中庸を心がけ，理解力があり，賢明な者を見たことがない」と感嘆したという［RJ：96-101］。こうした会談の事実は上述のギブの説明の中にも全く確認できないが，少なくともこの逸話からは8世紀前半のアラブ・ムスリムによる中央アジア支配が上述のごとく，常に東方からのトゥルク（この場合は，突騎施）による脅威に曝されていたことが窺えよう。

アッバース朝時代にはアラビア語で多くの地理書が書き残されたが，これらのうちでもっとも古い著作は，上述したイブン・フルダーズビフの『諸国と諸道』である。この著作には「トュルキシュのハーカーンの町」［MM：29］や「トグズグズのハーカーンの町」［MM：31］などの記事が見られる。後者の「トグズグズ（التغزغز）のハーカーンの町」についての情報源がTamīm b. Baḥrという人物の旅行記録（821年頃）であることは，ミノルスキーの研究によって明らかにされており，トグズグズはウイグル（回紇/回鶻）のことであり，「ハーカーンの町」は漠北時代のウイグル・カガン国の都オルホン河畔のカラ・バルガスン[10]に比定されている［Minorsky 1948：275-305］。

ヒジュラ暦309（921）年アッバース朝のハリーファ，ムクタディルの許からヴォルガ・ブルガール王の本営に派遣されたイブン・ファドラーンが途中サーマーン朝の首都ブハーラーを訪れた際，宰相のジャイハーニーに君主との謁見などの便宜を供されたことが知られている［家島 2009：54-5］。このジャイハーニーは自ら中央アジアを中心として広範囲に情

8）この人物は，ムウタスィムの護衛隊長で，ファルガーナ出身のトゥルク系支配者の一族。ムタワッキルに幼時より仕えて書記として昇進し，エジプト総督を務め，ジャーヒズとも交際した。861年12月11日の夜，ムタワッキルと共に暗殺された［EI²: al-Fath b. Khāqān b. ʻUrtūj – O. Pinto］。

9）バラーズリー（892年頃没）の『諸国征服史』によれば，ウマイヤ朝のハリーファ，ヒシャームによるジュナイドのホラーサーン総督任命は，112年（730/1）のことで，ジュナイドは先鋒を送ってハーカーンの息子を捕縛してヒシャームの許へ送ったという［FB：429；花田 1998：88］。

10）吉田 1988によってカラ・バルガスン碑文ソグド語版にも固有名詞を伴った「ハガン」という表現が頻出し，それらのハガンたちがマーニーの宗教を保護していたことが明らかにされている。

報を集めて『諸国と諸道』という著作を残したとされ，原本が伝存しないにもかかわらず，その情報は多くの著作に引用，転用されたとされる[11]。ジャイハーニーの収集した情報を利用したと考えられる地理書の一つが，372（982/3）年に現在のアフガーニスターン北部，グーズガーンの領主 Abū al-Ḥārith Muḥammad b. Aḥmad に献呈された著者不明のペルシア語による『世界境域誌』*Ḥudūd al-'Alām* である。この著作によれば，タッバト（Tabbat），ヒルヒーズ（Khirkhīz），キメク（Kīmāk），ルース（Rūs），ハザル（Khazar）の王はそれぞれ「タッバト・ハーカーン」，「ヒルヒーズ・ハーカーン」，「ハーカーン」，「ルース・ハーカーン」，「タルハーン（طرخان）・ハーカーン」と呼ばれていたという［HA：73，80，85，188，193］。

同じくジャイハーニーの情報を利用したとされるギャルディーズィー（Abū Sa'īd 'Abd al-Ḥayy b. Ḍaḥḥāk Gardīzī）やマルワズィー（Sharaf al-Zamān Ṭāhir Marwazī）によれば，トグズグズ（グズ）の王は「トグズグズ・ハーカーン」または「トグズ・ハーカーン」であった［ZA：567-70；TH：20a］。さらにギャルディーズィーでは「トゥルク・ハーカーン」，「ヒルヒーズ・ハーカーン」，「タッバト・ハーカーン」，「ハザル・ハーカーン」[12]，「ルースのハーカーン」［ZA：554，555，556，558，562，563，564，580，591］などのほぼ『世界境域誌』と共通する表現も見られる。このように，9-10 世紀に多く著作されたアラビア語の地理書やジャイハーニーの情報を引用したと思われるペルシア語の地理書，歴史書において，トゥルク諸族のみならずタッバト（ティベット），ルース，ハザルなどの諸民族の王たちがそれぞれハーカーンと呼ばれていたことは明らかである。ムスリムの著作家たちにとって彼らは無論異教徒であり，上述のようにタバリーがサーサーン朝時代や初期イスラーム時代について記録したハーカーンたちについては，専ら彼らの軍事的な脅威が強調されるだけで，その内面や宗教についての言及はなかったが，前述のタミーム・ブン・バフルの旅行記に基づくイブン・フルダーズビフの「トグズグズ・ハーカーンの町」についての記述には「町には火を崇拝するマジュース（マゴス＝拝火教徒）やズィンディーク（マーニー教徒）がいる」とされていて，トゥルクについての多少とも具体的な情報が載せられるようになっていったのである。

尚，作品が成立した時代は 11 世紀になるが，イーラーンの民族的叙事詩と言えるフェルドウスィー（Abū al-Qāsim Firdawsī）作（1010 年頃）のペルシア語韻文『王書』*Shāh-nāma* にもハーカーンの語は伝説上のカヤーニー朝の王カイホスロウの時代から，サーサー

11） ジャイハーニーとその伝存しない著作に関する研究はバルトリド以来多くあるが，詳しいものとして Minorsky 1942：1-11；Göckenjan-Zimonyi 2001：1-49；EI²：Djayhānī-Ch. Pellat などを参照。

12） イブン・ファドラーンの旅行記によれば，ハザルの王はハーカーンであり，「偉大なハーカーン」とも言われている［家島 2009：295，303-5］。バラーズリーによれば，サーサーン朝時代からアルメニア方面に出没していたトゥルクのハーカーンがおり，このハーカーンとはハザルのハーカーンのことを指すのであろう［FB：196，204；花田 1992：101，115］。

ン朝時代まで度々出てくる。『王書』では「チーンのハーカーン」（خاقان چين | چينى）として現れる場合が多く[13]，ハーカーンはチーン（中国）の王の称号として用いられる場合も多かったことも付け加えておきたい。

Ⅲ　西暦11世紀以降モンゴル侵入までのムスリム史料中のハーカーンの使用例

これまでに挙げたハーカーンという語の使用例は，イスラーム改宗以前のトゥルクや周辺諸民族における使用例をムスリム史料が記録したものであったが，10世紀の後半にはトゥルクの一部がイスラーム改宗を個人単位ではなく，集団単位で行なうようになり，トゥルクのムスリム化が進行していった。こうした状況の中で記録を残す側にもムスリムとなったトゥルクに対する認識が変化してハーカーンという語の使用例にもその認識の変化が表れてくるのである。それを端的に示すのは，先述のマフムード・カーシュガリーによる語義の説明である。カーシュガリーは自身がイスラーム改宗を経たトゥルクの一員として，トゥルクの言語や「神の軍隊」としてのトゥルクの特質を知っておくことの重要性を『トゥルク諸語集成』の冒頭で説いている［井谷 2000：263-79］。そしてハーカーンはアフラースィヤーブの子孫とされる支配者の称号であり，「ハーカーニーヤ」はカラハン朝を指す語として用いられるようになったのである。

既にデルファーによって使用例が挙げられているナルシャヒー，バイハキー，ナースィル・ホスロウなどの資料を除き，以下では11世紀以降の，特にイーラーン以東の地域で遺された，筆者自身がその写本調査を行なったことのあるものを中心としたムスリム史料中に現れるハーカーンという言葉の使用例を挙げていく。まず，462（1069/70）年カラハン朝に仕える大ハージブ（ūlūgh khāṣṣ ḥājib）ユースフによって著されたアラビア文字による現存最古の「ボグラ・ハンの言葉，トゥルク語」（カラハン朝トゥルク語）によって書かれた韻文作品『幸福を与える知恵』*Qutadghu Bilig* では，この著作が献呈された君主の名が「至高なるハーカーン」（خاقان الاجل）「ナースィルルハック・ワッディーン・タフガージ・ウールーグ・ブーグラー・カラーハーン・アブー・アリー・ハサン・ブン・アルスラーン・ハーン」（Nāṣir al-Ḥaqq wa al-Dīn Ṭafghāj ūlūgh Būghrā Qarā-khān Abā ʻAlī Ḥasan b. Arslān-khān）［QB-F：17］となっており，カラハン朝の支配者が自らハーカーンを称していたことは明らかである[14]。

13）筆者が調べたところによると，各1箇所のみ「トゥルクのハーカーン」「ルームのハーカーン」という表現が現れる句を見出したが，「チーンのハーカーン」という表現が最も多く現れ（112回），ハーカーンという語が単独で現れる場合にはチーンかトゥルクのどちらか，もしくは時として両方の支配者を指す語として用いられていると考えられる［ShN：Vol. 2-8］。

14）この部分は，『クタドグ・ビリグ』のファルガーナ写本にしか見られない。アラビア文字による↗

次に，475（1082/3）年カスピ海東南岸地域を支配していたズィヤール朝の支配者カイカーウス（'Unṣur al-Ma'ālī Kaykāwus b. Iskandar）が執筆したペルシア語の処世訓『カーブースの書』*Qābūs-nāma* に載せられたブワイフ朝時代の文人宰相サーヒブ・イスマーイール・アッバード（Ṣāḥib Ismā'īl 'Abbād, 995 年没）の逸話（第 40 章）に，カーシュガルにいる密偵からの情報の中に「トゥルキスターンのハーカーン」という表現が出てくる［QN：219-220；黒柳 1969：157-8］。カーシュガルやトゥルキスターンという具体的な地名を伴っていることからも，このハーカーンがカラハン朝の支配者を示していることは疑いがない。

479（1086/7）年にセルジュク朝の宰相ニザームルムルク（Niẓām al-Mulk Abū 'Alī al-Ḥasan al-Ṭūsī，1092 年没）によって著された『統治の書』*Siyar al-Mulūk* の中でも第 40 章の後半，ラカブ（称号）の濫発を戒める部分の中にハーカーンの語が出てくる。ここで取り上げられているのは，ガズナ朝のスルターン，マフムード時代（998-1030）の逸話であり，以下に概要を紹介する[15]［SM，201-10］。

スルターン，マフムードはアッバース朝のハリーファ，カーディルからラカブを求め，「国運の右手」（Yamīn al-Dawla）の称号を得ていたが，彼に従属するサマルカンドのハーカーンには「国運の援助者，神のハリーファの補佐人，東方とスィーンの王」（Ẓahīr al-Dawla Mu'īn Khalīfa Allāh Malik al-Sharq wa al-Ṣīn）という 3 つのラカブがあり，マフムードはこれを妬んでハリーファに使者を送り，ラカブの増加を願ったが，叶えられなかった。マフムードはハーカーンの宝庫からラカブに関する証書を盗み出すことをもくろみ，読み書きができて能弁なトゥルク系の女性にこの用務を託した。この女性はガズニーンからカーシュガルのハーン，ウズゲンドのハーンの許を経てサマルカンドへ着き，「至高なるハーカーン」（خاقان اجل）の妻であるハートゥーンに取り入り，ハーカーンの信任を得て当初の目的である証書を入手し，周到な手筈を整えて証書をガズニーンへ持ち帰った。マフムードは，証書をバグダードのハリーファ，カーディルの許へ送り，この証書は部下の者がサマルカンドの市場で幼児が取り合っていたのを少しの干しブドウを与えて粗悪な紙の値段で買い取って来たものだと伝え，このように証書の値打ちを知らず，それを軽視する者にはいくつもラカブを授けるのに，自分には一つしかくれない，と不満を露わにした。それでもハリーファはハーカーンに叱責の手紙を送ったものの，マフムードの望みは叶えられず，マフムードの使者はバグダードの大カーディーを味方にして時にはハリーファの廃位さえほのめかしながら圧力をかけ続け，最終的に「宗教の保証人」（Amīn al-Milla）というもう一つのラカブを手に入れたというものである。

この逸話が事実かどうかを確認する手だてはないが，ガズナ朝のマフムード時代サマルカンドにバグダードのハリーファから三つのラカブを授与された「至高なるハーカーン」（こ

↘ もう一つの写本であるカーヒラ写本では「タウガージ・ブグラー・ハーン」の名のみである［QB-M：16］。

15） この逸話は既に勝藤 1976：68-72 で紹介されている。

の表現は前述『クタドグ・ビリグ』中のカラハン朝の君主の称号と同一である。）がおり，彼の配下にはカーシュガルやウズゲンドの「ハーン」がいたという状況を背景にこの逸話が進行していることは間違いない。この逸話の中でハリーファがマフムードのラカブ授与の要望に難色を示した理由を示す部分で「ハーカーンは無知であり，トゥルクであり，辺境の主である。彼の要求を我々は，無知ゆえに，また彼の面目のためにかなえたのだ」と述べているのは，いわば田舎大名としてのハーカーンに対する揶揄や軽侮を示したものと理解できる[SM：202]。そしてこの揶揄や軽侮は，この文脈の中で単にハリーファ個人の内部から発せられただけではなく，この逸話を著作中に載せたニザームルムルク自身の認識や価値観の発露，さらには当時のバグダードなどでの風潮でもあった可能性が高い。

12世紀半ばに執筆され，ゴール朝の君主に献呈されたニザーミー・アルーズィー・サマルカンディー（Aḥmad b. ʻUmar b. ʻAlī al-Niẓāmī al-ʻArūḍī al-Samarqandī）作のペルシア語による『四つの講話』*Chahār Maqāla* の中にも，ガズナのスルターン，マフムードがマーワラーアンナフルのブグラー・ハーンに送ったという手紙の中でブグラー・ハーンはハーカーンと呼ばれ，カラハン朝が「ハーカーン家」（Āl-i Khāqān, Khāqānīyān）と称されている例もある［ChM：40-41，44，73；黒柳 1969：227，231，254，274］。

556（1160/1）年かその翌年に献呈されたと推定されているザヒーリー・サマルカンディー（Muḥammad b. ʻAlī al-Ẓahīrī al-Samarqandī）作のペルシア語による『スィンドバーズの書』*Sindbādh-nāma* では，作品が献呈されたクルチ・タムガージ・ハーカーン（Alp Qutlugh Tungā Bilgā Abū al-Muẓaffar Qilij Ṭamghāj Khāqān）は「王たちのうちで最も公正なる者，スルターンたちのうちで最も優れた者，知識あり，公正なる最大のハーカーン」（اعدل ملوك وافضل سلاطين خاقان عالم عادل اعظم）と称されている［SBN，8］。このクルチ・タムガージ・ハーカーンは「ルクヌッドゥンヤー・ワッディーン」「神の代理の明証」「信者たちの長の援助者」（Rukn al-Dunyā wa al-Dīn, Burhān Khalīfa Allāh Nāṣir Amīr al-Mu'minīn）の他に「トゥルクとアジャムの庇護者」「トゥルクの王たちの冠」（Mawlā al-Turk wa al-ʻAjam, Tāj Mulūk al-Turk）など17種もの形容辞が付されているので[16]，先に挙げた『統治の書』に見える逸話が伝えるように，ラカブが濫発されて冗長になっていく傾向を明示している。

13世紀にはいって622（1225/6）年以降に写本が完成したと考えられるフサイニー（Ṣadr al-Dīn Abū al-Ḥasan ʻAlī al-Ḥusaynī）作のアラビア語史料『セルジュク朝国運の諸情報』*Akhbār al-Dawla al-Saljūqīya* の中にもセルジュク朝のスルターン，アルプ・アルスラン，マリクシャーフ時代に4度起こったカラハン朝に関わる紛争時にカラハン朝の支配者は

16）上述の他に Malik Mu'ayyad Muẓaffar Manṣūr Muʻaẓẓam Sharaf Mulūk al-Umam, Ẓahīr al-Imām Naṣīr al-Anām Ḍiyā' al-Dawla Bahā' al-Milla Malja' al-Umma Jalāl al-Mulk, Ghiyāth al-Islām wa al-Muslimīn Qāmiʻ al-ʻUdāt wa al-Mutamarridīn Ẓill Allāh fī al-Arḍīn Sulṭān Arḍ al-Sharq wa al-Gharb という表現が名に先行している。

ハーカーンと呼ばれている［ADS：28, 46, 59-61, 65-6］。

前述の語義の説明のところで引用したカーシュガリーを含めて以上7例を挙げた11世紀以降モンゴル侵入以前の西アジアや中央アジアで書かれたペルシア語，アラビア語，トゥルク語資料の中では，ハーカーンは同時代に存在したイスラーム国家であるカラハン朝の支配者の自称・他称であったことは間違いなく，この一族とは系統上のつながりを持たないセルジュク朝をはじめ各地のムスリム支配者が通例としてハーカーンを称することはなかった。但し，筆者がこれまで調べた中には，この時代にカラハン朝以外の支配者がハーカーンを称した例が2例ある。

その一つは，ミノルスキーがテクストを出版したシルヴァーンとダルバンドの歴史の中で，有名なペルシア語詩人ハーカーニーの筆名が由来する支配者シルヴァーンシャーフ，マヌーチフル（在位1120-60）がハーカーンを称していたことである［Minorsky 1958, txt 28］。この記録はオスマーン帝国の歴史家ムナッジム・バシ（Aḥmad b. Luṭf Allāh Munajjim-bāshī, 1702年没）の著作*Jāmi' al-Duwal*に拠ったものだが，その記事だけでなく，称号の使用を明示するクーフィー体3行分のアラビア語石板銘文が現存している[17]。その原文は以下の通りである。（原文中の縦線は改行を示している。）

امر ببناء سور هذه المدينة الملك المعظم العالم العادل المظفر المنصور | المجاهد فخر الدين
والدولة عماد الاسلام والمسلمين | خاقان الاكرم شروانشاه الاكبر ابو الهيجاء منوجهر بن .....

日本語訳：「偉大で，知識あり，公正なる，勝利する，神に助けられ，聖戦に従事する王，ファフルッディーン・ワッダウラ，イスラームとムスリムたちの支柱，最も高貴なハーカーン，最大のシルワーンシャーフ，アブルハイジャー・マヌーチフル・ブン……［以下判読できず］がこの町の城壁の建設を命じた。」

銘文中の「この町」とはバクーの旧市街地のことで，城壁の建設を命じたマヌーチフルの称号は，「王」に続いてハーカーンとシルワーンシャーフが文章上で並列されている。サーサーン朝の王統に連なるとされていたシルワーンシャーフ，マヌーチフルが12世紀にハーカーンを称していた理由についてミノルスキーは，現在のダゲスタン地域へのトゥルク的称号や地位名称の浸透はかつて歴史的に隣接していたハザル王国の影響下で起こったのかもしれないと説明しているが［Minorsky 1958：99］，筆者もこれを妥当な背景説明であると思う。カラハン朝とは特に系譜的なつながりが見られず，民族的にも自らがトゥルクであるとの意識をもっていたとは考えにくいシルワーンシャーフ，マヌーチフルがハーカーンという称号を使用した例は歴史的に興味深いが，イーラーン，トゥルク両系統をはじめとして多民族が複雑に共生・混淆するトランスコーカサス地域の支配者が称した特例とは考えられないであ

17) Бретаницкий 1965：27の掲載写真を参考にした。Ашурбейли 1983：128にロシア語訳が載せられている。

ろうか。

カラハン朝以外の支配者がハーカーンを称したいま一つの例は，ウトビー（Abū Naṣr Muḥammad b. Muḥammad al-ʿUtbī，1036年または1040年没）作のガズナ朝のセビュクテギン，マフムード時代を扱った歴史書である『ヤミーニー史』*Kitāb al-Yamīnī* の602（1205/6）年頃に作られたと考えられる縮約ペルシア語訳（Abū al-Sharaf Nāṣiḥ b. Ẓafar al-Jurfādaqānī 作）の冒頭部分に見られるシャムスッダウラ・ワッディーン・アイトグムシュ（Shams al-Dawla wa al-Dīn Aytoghmish）という人物に付された「最大のハーカーン，偉大なる帝王」（خاقان اعظم پادشاه معظم）という称号である［TTY：5］。ここに出てくるアイトグムシュは，セルジュク朝の滅亡後のイラークのアタベグ，イルドュギュズ（Ildögüz）朝のジャハーン・パフラヴァーンの下僕（名前から見てトゥルク系）の出ながら，その子ウズベグ（Ūzbeg）を傀儡として一時実権を掌握していた人物として知られているが[18]，ハーカーンを称した具体的な理由は不明である。

以上，11世紀以降モンゴル支配時代に至る，筆者が調べ得たペルシア語，アラビア語，トゥルク語資料中のハーカーンという言葉の使用例を挙げてきたが，この時代のあらゆる資料を全て調べ尽くした上での結論という訳ではなく，また上述のような二つの例外はあるものの，この時期のハーカーンという言葉は，主として中央アジアのムスリム・トゥルク系の王朝であったカラハン朝の支配者たちの自称・他称として使用されていたという筆者の理解に大過あるまいと考える。また，上掲『統治の書』の記述からもわかるように，カラハン朝の国家体制上，カラハン朝には複数のハーンたちがおり，ハーカーンはそれらのハーンたちの最上位者を指していたと言える。

Ⅳ　モンゴル支配時代のハーカーン称号の使用例

1206年チンギズ・ハーンの即位に始まるモンゴル帝国では，歴代の支配者が「ハーン」や「カーアーン」を称したことはよく知られている。モンゴルの支配者たちがハーンを称した理由は，上記のようなカラハン朝の先例を直接引き継いだ訳ではなく，鮮卑以来の北アジア草原遊牧世界の覇者としての称号の伝統に則ったことは疑問の余地がない。モンゴル帝国全体に対して大元ウルスを直接統べる至高の支配者カーアーンが君臨し，ジョチ，チャガタイ，フレグの各ウルスには，それぞれ一人ずつのハーンが存在した。西アジアでは1260年に成立したモンゴル政権イルハン（Īl-Khān）国の支配者たちは初代フレグ以降14世紀半ばまで継続してハーンを称し，ハーンと呼ばれた。以下で取り上げる使用例も全てイルハン国及びその後の時代の史料中に見えるものである。

18）ラシードゥッディーンの『集史』によれば，1211-18年の間にトゥルクマーンのアミールを免ぜられたスライマーンという人物によって殺害された［JT：434，481］。

ルーム・セルジュク朝のスルターン，カイホスロウ3世（在位1266-84年）の宮廷で書かれたイブン・ビービー（al-Ḥusayn b. Muḥammad b. ʻAlī al-Jaʻfarī al-Rughadī Ibn Bībī）のペルシア語による著書 *al-Awāmir al-ʻAlāʼīya fī al-Umūr al-ʻAlāʼīya* はルーム・セルジュク朝時代の最も重要な歴史書である。書名の中の最初の「アラーイーヤ」はこの書物が献呈されたイルハン国の有力者であり，有名な『世界征服者史』*Tārīkh-i Jahān-Gushāy* の著作[19]を残した歴史家であったアラーウッディーン・アターマリク・ジュヴァイニー（1283年没）を指し，二番目の「アラーイーヤ」は13世紀前半セルジュク朝の最も有名なスルターンであったアラーウッディーン・カイクバード1世（在位1220-37年）のことを指している。この著作中には計31箇所ものアターマリク・ジュヴァイニー及びその兄弟で，フレグ時代以降20年にわたってイルハン国の宰相を務めたシャムスッディーン・ムハンマド・ジュヴァイニーへの讃辞が記されている[20]。そのうちアターマリクに対しては「ハーカーンたちの上腕」（عضد الخواقين），「ハーカーンたちの補佐人」（معين الخواقين）という二つの形容辞［AA：6，21］が，シャムスッディーン・ムハンマド[21]に対しては「ハーカーンたちの右手」（يمين الخواقين），「ハーカーンたちの宝庫」（ذخر الخواقين）という二つの形容辞［AA：12，707］がそれぞれ付されている。ジュヴァイニー兄弟の経歴や立場からしてこれらの表現中に現れる「ハーカーンたち」とはモンゴル（イルハン国）の支配者たちを指していることは疑いない。

710（1310/1）年に完成したモンゴル支配時代の著名な世界史であるラシードゥッディーン（Rashīd al-Dīn Faḍl Allāh Hamadānī）の『集史』*Jāmiʻ al-Tawārīkh* には，作品が献呈されたスルターン・ムハンマド・ホダーバンデ・ハーン（ウールジャーイトゥー）の称号として「最大のスルターン，最も高貴なカーアーン（قاآن اكرم），イスラームのシャハンシャーフ，人類の奴隷たちの所有者，最も公正なるイールハーン（ايلخان اعدل）……」の表現が見られ，ここではハーカーンではなく，「カーアーン」という称号が用いられている［JT：2］。

699年シャアバーン月下旬（1300年5月中旬）に執筆が開始されたワッサーフ（ʻAbd Allāh b. Faḍl Allāh Waṣṣāf al-Ḥaḍra）の著作『ワッサーフ史』*Tajziya al-Amṣār wa Tazjiya al-Aʻṣār/Tārīkh-i Waṣṣāf al-Ḥaḍra* の冒頭では当時のマフムード・ガーザーン・スルターンに対して「イスラームの帝王，人類の奴隷たちの所有者，スィカンダル（イスカンダル）

19） この史料中のハーンという語の使用例については Doerfer 1967：149-50 にまとめられている。

20） イブン・ビービーの史書はその写本末尾にも明白な完成年代が記されていない。この史書中の内容で最も年代が新しいのは679（1280/1）年の事件であり［AA：735-42］，史書の最末尾にアターマリク・ジュヴァイニー（681年ズルヒッジャ月4日/1283年3月5日没）への讃辞が見られることから［AA：742］，679-81（1280-3）年の間に完成したことが推定されるのである。

21） この人物は1277年のマムルーク朝スルターン，バイバルスの遠征後混乱した状況を収拾するべくイルハン国からルームへ派遣された［井谷 1985：49-50］。これよりも以前からシャムスッディーン・ジュヴァイニーはルームとの関係を有していたらしく，アナトリアのスィヴァスの町中心部にはこの人物によって670（1271/2）年に建設されたことを示す石板銘文の付されたマドラサ（チフテ・ミナーレリ・マドラサ）の遺構が残っている。

の高邁な志を持ち，ハーカーンをグラームとするイールハーン，信仰を持つ民の安寧と安全の天蓋，世界のハーンたちのハーン（خان خانان جهان）」という表現［TW-HP：8］が，また，703年シャッワール月11日（1304.5.17.）ガーザーン・ハーンがカズヴィーン近郊で逝去し，ホダーイバンデ・ハーンが後継したという知らせがシーラーズへ届いた同年ズルカアダ月14日（1304.6.18.）の金曜日の礼拝時に読まれたというフトバをそのまま引用した部分の末尾にはホダーイバンデ・ハーンについて「ハーンの子のハーンの子のハーン（الخان بن الخان بن الخان），時のスルターンたちのスルターン，最大のハーカーン（الخاقان الاعظم），世界のシャーハンシャーフ，イスカンダルの再来……」という表現が用いられている［TW，Ⅳ-153］。後者は特にトルコ共和国イスタンブル市のヌール・オスマーニーイェ図書館所蔵の著者自筆写本（711年シャアバーン月/1311年12月～1312年1月筆写完成）にも見られるもので歴史的な信憑性が高い［TW，MS Ⅳ-111a］。

イルハン国時代でもムスリムに改宗したガーザーン（在位1295-1304），ウールジャーイトゥー（在位1304-16）時代になるとそれ以前には例が見られないアラビア文字による刻銘文資料が残されているが，以下にその原文を挙げる700年ラジャブ月朔日（1301.3.12.）の日付を持つトルコ共和国トカト博物館所蔵の石板銘文，及び708（1308/9）年の記録を持つアマスヤのダールッシファー入口上方の石板銘文［井谷2007：④銘文］にハーカーンの表現が見られる。トカト博物館（Env. No 812）に所蔵されるガーザーン・ハーン時代の5行からなる石板銘文[22]の内容は次のようである（写真/筆者撮影）。

22）この銘文はトカトの主要な刻銘文資料を集めたUzunçarşılı 1927に載せられていない。

(アラビア文字の原文)

غازان خان | امر بعمارة هذه التربة المرحوم المغفور قطب العارفين ولي الله سلطان | محمود نور الله ضريحه في ايام الدولة السلطان الشرق والغرب | خاقان اعظم باذشاه معظم ملجأ وملاد بني آدم خلد الله سلطانه | العبد الضعيف الراجي المحتاج الى رحمة ربه خواجه ناصر بن عبد الله احسن الله عواقبه في التاريخ غرة رجب سبع مائة

(日本語訳)

ガーザーン・ハーン 東と西のスルターン，最大のハーカーン，偉大なる帝王，アーダムの子孫たちの避難所 —— 神がその権力を永遠ならしめるように —— の御世に，その主の慈悲を求め，必要とする弱き僕，フワージャ，ナースィル・ブン・アブドゥッラーフ —— 神がその末路を良きものとするように —— が，700年ラジャブ月朔日に真知ある者たちの極【クトブ】，神の聖者【ワリー】，故スルターン・マフムード —— 神が彼の墓を照らすように —— のこの墓廟の建設を命じた。

この銘文にはアラビア語の文法上いくつかの誤りが見られ[23]，末尾の日付は明確に読み取りがたい箇所があり[24]，墓廟が建設されたというスルターン・マフムード（ガーザーン・ハーンのムスリム名でもある）という人物に関しても僅かな情報しかないが[25]，この銘文上で冒頭に置かれたガーザーン・ハーンが「東と西のスルターン，最大のハーカーン，偉大なる帝王」と称されていることは明らかである[26]。

カーシャーニー（Abū al-Qāsim ʻAbd Allāh b. Muḥammad al-Qāshānī）の著作である『ウールジャーイトゥー・スルターンの歴史』*Tārīkh-i Ūljāytū Sulṭān* では，703-16（1304-16）年の歴史が扱われる，ガーザーンの後継者であったウールジャーイトゥー・スルターン・ムハンマド・ホダーバンデに対して「最大のハーカーン（خاقان الاعظم），諸民族の奴隷たちの所有者，トゥルクとアジャムのスルターンたちのスルターン」という形容辞が用いられている［TU：3］。

14世紀後半の767年ラジャブ月4日（1366. 3. 17.）に完成し，イルハン国の後継国家の一つであったジャラーイル朝のシャイフ・ウヴァイス・バハードゥル・ハーン（在位1356-74）に献呈されたナヒチェヴァーニー（Muḥammad b. Hindūshāh Nakhjāwanī）の著作『諸位階の任命についての書記の手引』*Dastūr al-Kātib fī Taʻyīn al-Marātib* は，書記たちが様々な文書を作成する際の模範文例集であるが，この中におさめられたスルターンたち相互の文通例6種の第3種の文例冒頭には「最大のスルターン，最も公正で，高貴なるハー

23) （التربة, الدولة السلطان）の3箇所は文法上定冠詞が不要である。

24) 「ラジャブ」という月名は明確に読み取りがたい。その前後は上記のように読める。

25) ラシードゥッディーンの『集史』によれば，ガーザーンのイスラーム改宗後その敵手であったバーイドゥーの許より派遣された使者として Shaykh al-Mashāyikh Maḥmūd の名前がみえる［JT：1256］。しかし，この人物が上記のスルターン・マフムードと同一であるという確証はない。

26) 「最大のハーカーン，偉大なる帝王」（Khāqān Aʻẓam Bādhshāh Muʻaẓẓam）という部分は定冠詞が付されず，ペルシア語のエザーフェを付けて読まれるような表記である。

カーン」（سلطان اعظم خاقان اعدل اكرم）という相手方への呼びかけの文言が記録されている[DK：127]。

以上に挙げた刻銘文資料の2例を含めて13世紀後半から14世紀半ば以後までのペルシア語史料中に見えるハーカーンの語の使用例を検討してみると，イルハン国を中心とした，特にガーザーン以降のムスリム改宗したモンゴルの支配者たちの称号や形容辞として，スルターンという語と並列で使用されたことが明らかになる。前節での説明のように，11世紀以降モンゴル時代までのムスリム諸資料中で主としてカラハン朝を指し，遊牧草原社会の至高の君主というより，時には田舎大名を指す軽侮や揶揄の意味すら含むと思われる語でもあったハーカーンという表現を，モンゴルの支配者たちが，セルジュク朝以来のムスリム支配者を指すスルターンの語と並列して新たに自らの権威や出自を誇示する自称として用いるようになった背景には，北アジアの草原遊牧社会の覇者となったモンゴルが，西アジアにおいてもその圧倒的な軍事的優位を利してフワーラズム・シャーフ朝，イスマーイール=ニザール派，さらにアッバース朝ハリーファ政権など既存の政治勢力を一掃して未曾有のモンゴル支配を打ち立てたという事態に対して，西アジアのムスリム社会や文化，主観と客観の両面における自己及び他者認識や価値観が13-14世紀に根本的な変容を迫られていたことを想定しなければならないであろう。上記のようなペルシア語史料や刻銘文資料中の使用例から見て14世紀初めにハーカーンの語は既に歴史の舞台から消え去った中央アジアのカラハン朝の支配者ではなく，マムルーク朝の領土を除き，アナトリア，イーラーン，イラーク，さらに東方の中央アジアや遥か中国までをも支配する大モンゴル国家の支配者の連枝たるイルハン国の支配者たちの出自，栄誉，権威を誇示する称号や形容辞へと変貌していたのである。ムスリム化したイルハン国の支配者によって使用されたハーカーンという称号は，最早単にトゥルクの王を意味する称号ではなく，理念的に世界征服者，世界支配者を含意するムスリム社会の頂点に立つ君主の称号となったのである。本稿での課題としているオスマーン朝のおけるハーカーン称号使用の背景についても，こうした歴史的状況を理解せずしては，説得的な結論が得られないであろう。

V　モンゴル時代からオスマーン朝へ

14世紀の初頭から歴史の舞台に登場するオスマーン朝初期の歴史については未だ不明の部分が少なくない。オスマーン朝の名祖であるオスマーン（1326年没）については，ガーズィー（Ghāzī）と称し，ベグ（Beg）と呼ばれていたことは確かであるが，この時代に書かれた歴史書はなく，貨幣も発行されず，刻銘文資料も残っていない。次のオルハン（Ūrkhān，在位1326-62）時代には貨幣が発行され，また刻銘文資料も残されているが，歴史書は書かれなかった。そして筆者の既発表の刻銘文資料中では，ムラード1世の時代（1362-89）に787（1385/6）年の年代のあるゲリボルのウル・ジャーミウ再建と790年ジュ

マーダーⅠ月初日（1388.5.8.）の日付を持つイズニクのニルフェル・ハトゥン・イマーレト建設を記録する石板銘文上にそれぞれ，ムラードの称号としてハーカーンの語（الخاقان الاعظم | الخاقان المكرم）が現れて来るのである［井谷 2008A：⑥，⑥b 銘文］。石板銘文上の記録からだけでも上記のアマスヤのダールッシファー，ウールジャーイトゥー時代のもの（708 年）からこれらムラード 1 世のものまで時間的にヒジュラ暦で 80 年近い間隔がある。筆者のこれまでの調査ではこの間に支配者が用いたハーカーンの称号や形容辞を記録した刻銘文資料は見つかっておらず[27]，またオスマーン朝ではこの間に書かれた歴史書などが残されていないために，確実な同時代の文献上の証拠に基づいてモンゴル時代からオスマーン朝へのハーカーン称号使用の直接的な転移を証明することは不可能である。

にもかかわらずムラード 1 世時代に，当時アナトリアにいくつもあった諸ベイリク（地方の小独立政権）の一つにすぎなかったオスマーン朝が何らの根拠もなく恣意的に，かつてカラハン朝やイルハン国のムスリム支配者たちの称号の一つであったハーカーンという表現を用い出したとは考えにくく，14 世紀初めのイルハン国の支配者たちが用いたハーカーンという称号との間に何らかの理念上，文献上のつながりを求めることが，オスマーン朝においてハーカーンという称号が使用された実例の存在を理由づける合理的な説明となるのではないか，と筆者は考える。以下で挙げるのは，同時代的，直接的な文献上の証拠が存在しないという状況の中で，後世に成立した史料やその背景に関わると思われる資料であり，オスマーン朝の支配者たちがハーカーンという称号を使用した時代背景や状況を考察する手掛かりを与えてくれるものであると考えられる。

まず挙げるべきは，14 世紀初めのモンゴル，及びトゥルク民族の精神世界，文化伝統の一端を反映したと思われる作品のひとつとしての『オグズ史』である。この作品は，ラシードゥッディーンの『集史』の第 2 部に含まれるもので，既に我が国では本田實信氏による紹介や要約訳，宇野伸浩氏による資料評価がなされ，トルコ共和国の歴史学者トガン（Zeki Velidi Togan）による現代トルコ語訳と訳注が出版されており，いずれも参考になる［本田 1973；宇野 2002；Togan 1972］。2005 年にはイーラーンで Muḥammad Rawshan による校訂本が出版されて利用が容易になった。『オグズ史』の内容は現実に展開された歴史ではなく，男女，父子，家族間の愛憎や英雄，豪傑の活躍などを扱った教訓的な説話に満ちており，預言者ヌーフの子ヤーフス（Yāfuth）はトゥルク語でウールジャーイ・ハーン（Ūljāy Khān）と称されたが，その子がディーブ・ヤーヴクー・ハーン（Dīb Yāwqū Khān）であり，その 4 子の一人カラーハーン（Qarākhān）の息子オグーズ（Ughūz）が前半部での主人公

27）ウールジャーイトゥーの子で，実質的に最後のイルハンであったアブー・サイード（1335 年没）時代の刻銘文資料をアナトリアで 6 点調査してきたが，現在までのところ，ハーカーンの称号使用例を見つけていない。アブー・サイードが「ハーン」（2 例），「バハードゥル・ハーン」（1 例）と称されている石板銘文は存在しており，今後の調査でハーカーンの使用例が確認できる可能性はあると考えている。

である。オグズは生まれながらに唯一神の信仰を持ち，成長して異教徒であった父と戦ってこれを斃し，3人の叔父たちの部衆をも屈服させ，トゥルクマーンの主張ではモンゴル(Mughūl）とは東方に留まったこれら3人の叔父たちの子孫のことであると説明される。その後オグズは，ヒンドゥースターン，チーン，マーチーン，ナンキヤース，中央アジアのトゥルク諸族，「闇の国」(Qarāhūlūn)，ダルバンド，シルヴァーン，アッラーン，アーザルバーイジャーン，グルジスターン，クルディスターン，ファラング，ルーム，ディマシク，ミスル，バグダード，イスファハーン，キルマーン，イラークをこの順序で征服し，長子クーン（Kūn/Kün）・ハーン（キュン・ハン）を後継者に指名して一千年の生涯を終えたという［JTO：1-54］。

キュン・ハンの時代にはオグズの6子，キュン=太陽，アイ（Āy）=月，ユルドゥズ(Yūldūz)=星，キョク（Kūk/Kök)=天，タク（Ṭāq)=山，テンギズ（Tangīz)=海，から生まれた各4子，計24人を祖とするオグズ24氏族にそれぞれ，タムガ（tamghā 標章）とオンゴン（ūnqūn 吉兆となる生物）が定められた［JTO：55-62］。その後の時代について叙述される諸事件についても，登場人物を含めて，これまでに知られているムスリム諸資料中にその情報源が見られるような記述はなく，年代記述が全く現れないこともあって『オグズ史』中の記事をトゥルク民族の歴史研究にそのまま用いることは不可能という印象が強い。オグズに22の部族があり，それぞれに部族毎の標識があることは，既に11世紀のカーシュガリーが記録しているが［DLT：40-1］，ラシードの『オグズ史』に見られるのとは順序が異なり，キュン・ハンなどオグズの6子の名前も現れない[28]。全体を通して『集史』に付された『オグズ史』はそれまでに西アジア，中央アジアで知られていたオグズに関する歴史的，文化的，言語的な諸情報を統合，整理，敷衍して当時のモンゴル支配の背景やモンゴル自身の種族的来歴をイスラーム史の枠組みの中で説明しようとする意図を以て構成された作品ということができよう。

この作品の終わり近く，ガズナ朝，セルジュク朝，フワーラズムシャーフ朝など歴史上に存在したトゥルク系諸王朝の支配者たちに僅かに触れた部分に「オグズ出身の帝王たちは，次の5人の息子の子孫であった。まずカユ（Qāyī)，ヤズィル（Yāzir)，エイミュル(Aymūr)，アヴシャル（Awshar)，ベクディリ（Bīkdilī)」という一文がある［JTO：94-5］。この中に出てくる「カユ」はオスマーン朝の王家が属していた部族とされており［Köprülü 1935：82-7］，『オグズ史』はその成立の由来からも全くオスマーン朝に関わる資料ではないが，この記事はモンゴル時代とオスマーン朝を結び付ける可能性のある微細な証拠の一つと考えられるのである。

次に挙げるべきは，現在トルコ共和国はイスタンブル市内トプカプ宮殿博物館図

28）オグズに関して最も詳しい文献学的，歴史学的な研究を行なったのは，Faruk Sümer であり，カーシュガリーとラシードのオグズ部族に関する名称や各部族の標識は第2部の初めにまとめられている［Sümer 1972：201-10］。

書館（Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi）に所蔵される Revan 1390, 1391 の登録番号を持つ二つのトゥルク語写本である。この二つの写本はほぼ同じ内容を持っているが，Revan 1390 は「セルジュク家の歴史，トゥルク語，サンジャクから来たもの」（تاریخ آل سلچوق ترکی سنجاقدن کلن）とのタイトルで，全 288 葉，書写年代の記録なし，Revan 1391 は扉頁に「モグールの書」（مغول نامه）「皇子，スルターン，バーヤズィード」（شاه زاده سلطان بایذید）と書かれ，全 455 葉の大判で，末尾に 951（1544/5）年という書写年代が明記されている。この二つの写本に加えてさらにベルリンの写本をも調査したヴィッテクによれば，これらの写本となっている作品の著者はオスマーン朝のスルターン，ムラード 2 世時代（1421-51）の書記官僚ヤズジュオウル・アリー（Yazïjïoghlu ʻAlī）であり，作品が完成したのは，827（1423/4）年であるという［Wittek 1952, 642-7］。

Revan 1390 では 8a-18a（Revan 1391 : 2b-19b）に上記ラシードの『オグズ史』の要約がオグズ 24 部族のタムガ，süngük[29] 付きトゥルク語で忠実に再現され，その後 18a-26b（Revan 1391 : 19b-77b）まではラーヴァンディー（Abū Bakr Muḥammad b. ʻAlī b. Sulaymān al-Rāwandī）のセルジュク朝史 *Rāḥat al-Ṣudūr wa Āyat al-Surūr* の記事が 471（1079）年まで訳され，それに続く 26b-261a（Revan 1391 : 77b-416a）まではイブン・ビービーの史書，前掲の『アラーウの事柄におけるアラーウの諸命令』のトゥルク語訳が続く。その後（262a-285a/Revan 1391 : 417b-454b）はラシードの『集史』ガーザーン・ハーン紀の記事（ガーザーンの他界まで）のトゥルク語訳が末尾の直前まで続いている［JT : 1253-1321］。このガーザーン・ハーン紀のトゥルク語訳中にペルシア語の原文には見当らない次のようなタイトルの記事が収録されている。

「スルターン，マスウードの従兄弟である，スルターン，アラーウッディーン・カイクバード・ブン・ファラーマルズの物語の残りとガーズィーたちの王，故オスマーン・ベグ・ブン・エルトゥグルルの手になるビレジュク征服の話」（267a-b/Revan 1391 : 424b-5b）

ذکر بقیه حکایت سلطان علاء الدین کیقباد بن فرامرز اوغلی برادرزاده سلطان مسعود و فتح بلاجوک بر دست ملک الغزاة مرحوم عثمان بک بن ارطغرل

タイトルに登場するスルターン，マスウード及びカイクバード（3 世）はルーム・セルジュク朝最末期の支配者であり，708（1308/9）年にマスウードが死去したことでセルジュク朝は滅亡した。すなわちこの話はモンゴル政権イルハン国の圧迫下に滅亡を迎えつつあったセルジュク朝末期のルームの政治状況を背景とするもので，そこにオスマーン朝初代オスマーン・ベグの事績が含まれているのである。全テクストの引用は煩瑣であるため，本稿の論旨と関連する部分のラテン文字転写テクスト及びその日本語訳を以下に引用する。（Revan

29） ラシードではオンゴンとなっている部分は「鳥」（qūsh）とされ，各部族に分配される動物の特定部位の肉が süngük（سکوک）である。

1390, 1391 の両原文を相補う形で再構成したトゥルク語テクストによる。)

Bu eṣnâda uc eṭrâfîndan ḫaber vardï ki Qayïdan Erṭuğrul oğlï ʻOṣmân Begi ucdağï Türk begleri derilip qûriltây edüp Oğuz töresin soruşup ḫân dikdiler deyü. Ol ḥikâyet bu minvâl üzerineydi ki ucdağï Türk begleri Oğuzun her boyından uc eṭrâfînda Tâtâr şerrinden qorqup yaylarlar ve qïşlarlardı. Rûzgârla qarşu Tâtârdan incinenler uca gelip çoğaldïlar. Fî'l-cumle ol illerin begleri ve kedḫüdâları cemʻ olup ʻOṣmân beg qatïna geldiler ve meşveret qïldïlar. Çoq qâl u qîlden sonra sözleri iḫtiyârï bu oldï ki ayïtdïlar Qayï ḫân ḫod mecmûʻ Oğuz boylarïn Oğuzdan sonra ağalarï ve ḫânlarïdılar ve Kün Ḫânın vaṣîyeti Oğuz töresi mûcibince ḫânlïq ve pâdişâhlïq Qayï ṣoyï varken özge boyï ḫânlarïnun ṣoyunuya ḫânlïq ve pâdişâhlïq dikmez. Çûn şimden gerü Selcûq sulṭânlardan bize çâre ve meded yoqdïr memleketün çoğï ellerden çïqdï. Tâtâr üzerelerine gereği gibi müstevlî oldï. Çûn merḥûm Sulṭân ʻAlâ el-Dînden daḫï size ṣafâ naẓar olmuşdur. Siz ḫân olun ve biz qullar sultânïmuz ḫizmetinde bu ṭarafa ğazâya meşğûl olalum dediler. ʻOṣmân Beg raḥimahu Allâhu daḫï qabûl etdi.

(日本語訳)

この間にウジの方面から知らせが届いた。カユ（部族の）出であるエルトゥグルルの息子オスマーン・ベグをウジのトゥルクのベグたちが選んで，集会【クリルタイ】し，オグズの慣習を尋ね合い，ハーンに立てたと。その話の様相は以下のようであった。ウジのトゥルクのベグたちは，オグズの各部族の出であり，ウジ方面でタータールの悪事を怖れて夏冬を過ごしていた。時と共にタータールから被害（を受けた）者たちがウジへ来て（その数は）増加した。要するにその部族のベグたち，戸主たちが集合してオスマーン・ベグの許へ来て，相談した。多くの話し合いの末，彼らの言葉は以下のようにまとまった。(旧来より）言われてきた。カユ・ハンはオグズの後，全オグズ部族のアガ（年長者）であり，ハーンであったと。キュン・ハンの遺言とオグズの慣習に従い，ハーンの位，帝王たる地位は，カユの家系が有る時には，他の部族の家系のハーンや帝王を立てない。今後セルジュクのスルターンたちから我々に救いや援助はなく，国の多くは彼らの手から離れ，タータールが国に相応しく支配者となった。故スルターン，アラーウッディーンからも汝への期待があったので，汝はハーンたれ，我ら僕は我らがスルターンに仕えてこの方面への聖戦に従事しようと彼らは言った。故オスマーン・ベグも（それを）受諾した。

この話の直後にはウジ（異教徒の領土との辺境地帯，特にセルジュク朝時代には西アナトリア）でハーンに即位したオスマーン・ベグが 699（1299/1300）年にビレジク（Bilecük）城塞を征服し，諸国に勢威が高まったことが書かれている。この話の要点は，オグズ，カユ部族に属するオスマーン・ベグが旧来のオグズの慣習に則り，ハーンに即位したということであり，カユ部族に属するオスマーン・ベグがハーンの地位や称号に相応しい人物であった

ことを強調している。ところが，このような内容の記録は他のいかなる同時代資料にもそれを確証する記述を見出せず，また，ハーンに即位したオスマーンはその後も同史料中で「オスマーン・ハーン」と呼ばれることはなく，依然として「ベグ」のままであり，同じカユ部族に属する彼の父エルトゥグルルやその祖先たちがかつて「ハーン」と呼ばれたという記事も全く見られない。

これらの事実を考慮すれば，先に Revan 1390, 1391 写本を検討したヴィッテクが結論したように［Wittek 1952：645］，特に上で引用・翻訳した部分は，その前後の記述（イブン・ビービーやラシードの作品の翻訳）のように特定の明確な情報源を持たず，トゥルク語訳の著者ヤズジュオウル・アリーが後世に挿入した「作り話」であり，その挿入の目的は，歴史を遡及してオスマーン朝の名祖オスマーンがオグズ部族のハーンの地位と称号に相応しい人物であったことを示すことにあったと考えられる。そして上記の「作り話」を歴史書の体裁を取った作品中に挿入することを可能ならしめたのは，他に文献上の証拠が見出せない現状では，14 世紀初めに書かれたラシードゥッディーンの『集史』に含まれた『オグズ史』の記述の存在であったとしか考えられない。ヴィッテクが述べるごとく，オスマーン朝ムラード 2 世の時代は「オグズ趣味」と称されるオグズ的伝統への回顧が見られた時期であったというが，その時代に著作を残したヤズジュオウル・アリーとて全く根拠を持たない虚構を作品中に挿入したのではなく，その著作の初めにトゥルク語訳したラシードの『オグズ史』に見られる，「カユ部族出身のオグズの帝王」という伝説（この伝説自体には，その背景となるような歴史的な裏付けが見出せないが）に沿ってセルジュク朝の衰退，滅亡とイルハン国支配の確立が同時代的に進行していた時期を扱った記事中に，オスマーン・ベグのオグズ族全体のハーン即位という「作り話」を挿入したのであろう。ヤズジュオウル・アリーの歴史書が全体としてイブン・ビービーやラシードのほぼ忠実なトゥルク語訳であることから見て，このようなオスマーン・ベグのハーン即位を伝える記事の特異性が目立つが，逆にいえばこの記事の挿入こそがヤズジュオウル・アリーの歴史書執筆の最も重要な目的であったともいえる。

ヤズジュオウル・アリーの歴史書の構成は，その後のオスマーン朝の歴史家たちにも影響を与えており，15 世紀末にオスマーン朝史を書いたムハンマド（メフメド）・ネシュリー（Muḥammad Neshrī）の著作 *Kitâb-i Cihân-nümâ* の冒頭部の構成は，オグズ史，セルジュク朝史，オグズ出身のオスマーン家の系譜という順に書かれている。ネシュリーによれば，オスマーン・ガーズィーがガーザーン・ハーン時代の 699 年に Bilecük, Söğüt 他 7 つの要塞を征服したことを記しているが，ハーン即位の記事はない［CN：50］。

お わ り に

以上，本稿ではハーカーンという言葉のアラビア語，ペルシア語，トゥルク語諸資料中の使用例を時代順に考察しながら，オスマーン朝において14世紀後半からハーカーンという言葉がスルターンと並んでその支配者たちの称号となるに至った歴史的な背景を考察してみた。考察の結果をまとめると以下のようになる。

1．ハーカーンという語は，イスラーム以前のサーサーン朝時代の王たちに関わる諸事件の中でしばしば登場し，それらの中には西突厥登場以前のトゥルクに関わるものもある。イスラームの開教以後はムスリム軍がマーワラーアンナフルでの対戦をしばしば余儀なくされた西突厥やトュルキシュの支配者を「トゥルクのハーカーン」と呼び，アッバース朝時代に著された地理書では，トゥルク（トグズグズ＝ウイグル）だけでなくルースやタッバト，ハザルの支配者たちもハーカーンと呼ばれることがあり，彼らはいずれもムスリム以外の異教徒であった。

2．10世紀の後半からトゥルクのムスリム化が進展すると，11世紀以降の特にペルシア語資料では，ハーカーンはカラハン朝の支配者たちの自称・他称となった。すなわちハーカーンはムスリム君主の称号の一つとなったが，ニザームルムルクの『統治の書』に見える使用例のように，バグダードやイーラーンの内地から見て中央アジア辺境の田舎大名を指す言葉として揶揄や軽侮の意味も込められる場合もあった。

3．13世紀に強大な軍事力を背景にモンゴルの中央アジア，西アジアの征服が行なわれ，シリア，パレスティナ，アラビア半島部を除く西アジアがモンゴルの支配下に置かれるようになると，13世紀末から14世紀前半にかけて，ムスリムとなったイルハン国のガーザーン，ウールジャーイトゥー兄弟は本稿で紹介した石板銘文上の例を含めて，ハーカーンの語を支配者の称号として使用し始めた。イルハン国の支配者たちは，それまでのムスリム社会におけるハーカーンの語の意味を一変させ，その位置付けを社会の頂点にまで上昇させ，モンゴルやトゥルクの王という意味の枠を超えたムスリム世界の至高の支配者の称号としたのである。

4．14世紀の後半，ムラード1世の時代になると，オスマーン朝の支配者がハーカーンという称号や「ムラード・ハーン」のような名乗りを刻銘文資料上で使用し始めた。オスマーン朝の支配者がハーカーンの称号やハーンの名乗りを始める先例となる，現存する文献的な証拠は，ムラード2世時代に書かれたヤズジュオウル・アリーのトゥルク語訳『セルジュク朝史』中のオスマーン・ベグのハーン即位の挿話にしか見出せない。ヤズジュオウル・アリーの記述により，ムラード2世以降のオスマーン朝支配者たちがハーカーンという称号[30]やハーンの名乗りを使用することには一定の根拠が与えられると考えられる

30）本稿で引用した翻訳中にもハーカーンの語は出てこない。ハーカーンの語の使用例は，ムラー↗

が，この史料の記述は14世紀初めにイルハン国で書かれたラシードゥッディーンの『集史』『オグズ史』を基盤としており，15世紀前半ヤズジュオウル・アリーによってトゥルク語訳され，その歴史書の構成中に定置される以前に，オスマーン朝においてラシードを基にした（またはそれと共通した）オグズ関連の情報が伝存していた可能性がある。

筆者がこれまで収集して来た刻銘文資料の残存状況から見れば[31]，ムラード2世から3世代前の曽祖父ムラード1世の時代（1362-89）にはオスマーン朝が上記のようなヤズジュオウル・アリーによって文字化される以前の形態でラシードの『オグズ史』に記されたような，もしくはそれに類似した伝説を既に保持しており，それを根拠として，ハーカーンという称号や「ムラード・ハーン」のような名乗りを使用していたのではないかと推測されるのである。ムラード1世の時代アナトリアの東方，イーラーン，イラークではイルハン国が歴史の舞台から消え，かつてのように明白にハーカーンを称号とする支配者がいなくなりつつあった。かたやオスマーン朝はムラード1世の下でバルカン半島側のルーメリにおける勢力拡大を加速化させ，国家としての規模もオスマーンやオルハン時代のベイリクを超え，その後の15世紀に「帝国」と呼ばれるにふさわしい段階への発展を始めていた。こうした状況の中でムラードは従来の称号である「ベグ」に代えて，本来モンゴルとは歴史上の親縁関係を全く持たないオグズ・カユ部族の小部族長の家系出身であったにもかかわらず，世界征服者たる余韻も消えやらぬイルハン国の支配者の称号の一つであった「ハーカーン」という称号を採用し，自らも「ムラード・ハーン」と名乗り始めたのではなかったか。

ムラード1世の時代既にラシードの『オグズ史』に類する伝説がオスマーン朝に存在していたという推測は，今のところ全く同時代史料の中に文献的根拠を見出せないが，ムラード1世が何の根拠もなく，ハーカーンという称号や「ムラード・ハーン」という名乗りを石板銘文や文書上で詐称していたということは歴史上あり得ないことであり，量はわずかでも確実に伝存する刻銘文資料記録を歴史上整合的に，またできるだけ無理なく解釈しようとすれば，上記のような推測（仮説）なしには説明がつかないのである。但し，推測はあくまで推測であり，今後ともより綿密に，また網羅的に文献上及び刻銘文資料上の調査と検討を続けて，本稿で提示したような推測（仮説）が果たして成り立つのかどうかを慎重に見極めていかなければならないのは当然のことであり，今後の検討の課題としたい。

↘ ド2世時代より以前には刻銘文資料中にしか見出せない。

31） ムラード2世時代以前にオスマーン朝の支配者がハーカーンを称号とした刻銘文資料上の使用例はムラード1世時代2，ムハンマド1世時代3の計5例ある［井谷2008A：⑥，⑥b銘文；井谷2008B：4-⑤銘文；井谷2011：B-②，③銘文］。一方，「ムラード・ハーン」「バーヤズィード・ハーン」「ムハンマド・ハーン」などの名乗りが見られる刻銘文資料は，これまでの調査で10点ある。そのうち既発表のものは，井谷2007：⑤銘文，井谷2008A：⑤b銘文，井谷2008B：4-②，③，④銘文，井谷2010：①b銘文，井谷2011：B-①，③銘文である。

参考文献

AA : Ibn Bibi, *al-Awāmir al-'Alā'īya fī al-Umūr al-'Alā'īya*, Tıpkıbasım, Ankara, 1956.

ADS : Ṣadr al-Dīn al-Ḥusaynī, *Akhbār al-Dawla al-Saljūqīya*, (ed.) Muhammad Iqbal, Lahore, 1933.

ChM : Niẓāmī 'Arūẓī, *Chahār Maqāla*, (ed.) Moḥammad Qazvīnī-Moḥammad Mo'īn, Tehrān, 1333.

CN : Mehmed Neşri, *Cihân-nümâ*, I. Cilt, (eds.) F. R. Unat & M. A. Köymen, Ankara, 1949.

DK : Muḥammad b. Hindūshāh Nakhjāwanī, *Dastūr al-Kātib fī Ta'yīn al-Marātib*, Том I-Часть 1, (ed.) А. А. Али-заде, Москва, 1961.

DLT : Maḥmūd al-Kāshgharī, *Dīwān Lughāt al-Turk*, Tıpkıbasım, Ankara, 1990.

FB : al-Balādhurī, *Futūḥ al-Buldān*, (ed.) M. J. de Goeje, Leyden, (repr.) 1968.

HA : *Ḥudūd al-'Ālam*, (ed.) Manūchihr Sotūde, Tehrān, 1340

JT : Rashīd al-Dīn Faḍl Allāh, *Jāmi' al-Tawārīkh*, 4 vols. (eds.) Muḥammad Rushan-Mostafā Mūsavī, Tehrān, 1373.

JTO : Rashīd al-Dīn Faḍl Allāh, *Jāmi' al-Tawārīkh, Tārīkh-i Oghūz*, (ed.) Muḥammad Rushan, Tehrān, 1384.

MM : Ibn Khurdādhbih, *al-Masālik wa al-Mamālik*, BGA 6, (ed.) M. J. de Goeje, Leyden, (repr.) 1967.

MU : al-Khwārazmī, *Mafātīḥ al-'Ulūm*, (ed.) G. van Vloten, Leyden, (repr.) 1968.

QB-F : Yūsuf Khāṣṣ Hājib, *Qutadghu Bilig*, II Fergana nüshası, Tıpkıbasım, İstanbul, 1942.

QB-M : Yūsuf Khāṣṣ Hājib, *Qutadghu Bilig*, III Mısır nüshası, Tıpkıbasım, İstanbul, 1943.

QN : Kaykāwus b. Iskandar, *Qābūs-nāma*, (ed.) Gholām-Ḥoseyn Yūsufī,Tehrān, 1345.

RJ : al-Jāḥiẓ, *Risāla ilā al-Fatḥ b. Khāqān fī Manāqib Jund al-Khilāfa wa Faḍā'il al-Atrāk* (*el-Cahız ve Türklerin Faziletleri*), (ed.) Ramazan Şeşen, İstanbul, 2002.

SBN : Ẓahīrī Samarqandī, *Sindbādh-nāma*, (ed.) Ahmet Ateş, İstanbul, 1948.

ShN : Firdawsi, *Shāh-nāma*, 8vols. (eds.) Djalal Khaleghi-Motlagh & Mahmoud Omidsalar, Abolfazl Khatibi, New York, 1988-2008.

SM : Niẓām al-Mulk, *Siyar al-Mulūk*, (ed.) Hubert Darke, Tehran, 2535/1976.

SN : Esin Atıl, *Süleymanname The Illustrated History of Süleyman the Magnificent*, New York, 1986.

TA : Ṭursun Beg, *Tārīkh-i Abū al-Fatḥ* (*The History of Mehmed the Conqueror*) text published in Facsimile with English Translation by Halil Inalcik and Rhoads Murphey, Minneapolis & Chicago, 1978.

TH : al-Marwazī, *Ṭabā'i' al-Ḥayawān*, (ed.) V. Minorsky, London, 1942.

TRM : al-Tabari, *Tā'rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, 13 vols. (ed.) M. J. de Goeje, Leyden, (repr.) 1964.

TTY : al-Jurfādaqānī, *Tarjuma-yi Tārīkh-i Yamīnī*, (ed.) Ja'far Shi'ār, Tehrān, 2537/1978.

TU : al-Qāshānī, *Tārīkh-i Ūljāytū*, (ed.) Mahīn Hambly, Tehrān, 1348.

TW-HP : Waṣṣāf al-Ḥaḍra, *Tajziya al-Amṣār wa Tazjiya al-A'ṣār* (*Geschichte Wassaf's*), I. Band, (ed.) Josef von Hammer-Purgstall, Wien, 1856.

TW-IV : Waṣṣāf al-Ḥaḍra, *Tārīkh-i Waṣṣāf al-Ḥaḍra*, Jild 4, (ed.) 'Alī Reẓā Ḥājiyān-nezhād, Tehrān, 1388.

TW-MS : Waṣṣāf al-Ḥaḍra, *Tajziya al-Amṣār wa Tazjiya al-A'ṣār*, Jild 4, Facsimile, Tehran, 1388.

ZA : Gardīzī, *Zayn al-Akhbār*, (ed.) 'Abd al-Ḥayy Ḥabībī, Tehran, 1362.

黒柳 1969：黒柳恒男訳『ペルシア逸話集 —— カーブースの書，四つの講話』平凡社，東洋文庫 134.

家島 2009：家島彦一訳　イブン・ファドラーン『ヴォルガ・ブルガール旅行記』平凡社，東洋文庫 789.

花田 1987-2001：花田宇秋訳　バラーズリー『諸国征服史』1～22 分冊（『明治学院論叢・総合科学研究』第 26, 28, 29, 30, 31, 34, 35, 36, 38, 39, 41, 43, 44, 45, 46, 50, 51, 52, 54, 58, 65, 66 号所載.

Doerfer, Gerhard (1967) *Türkische und Mongolische Elemente im Neupersischen*, Band III, Wiesbaden.

Gibb, H. A. R. (1923) *The Arab Conquests in Central Asia*, New York.

Göckenjan, Hansgerd & István Zimonyi (2001) *Orientalische Berichte über die Völker Osteuropas und Zentralasiens im Mittelalter Die Ǧayhānī-Tradition*, Wiesbaden.

Köprülü, Mehmed (1935) *Les Origines de l'Empire Ottoman*, Paris.

Minorsky, Vladimir (1942) *Sharaf al-Zamān Ṭāhir Marvazī on China, the Turks and India*, London.

Minorsky, Vladimir (1948) Tamīm ibn Baḥr's Journey to the Uyghurs, *BSOAS* XII-2, 275-305.

Minorsky, Vladimir (1958) *A History of Sharvān and Darband in the 10th-11th Centuries*, Cambridge.

Sümer, Faruk (1972) *Oğuzlar (Türkmenler) Tarihleri-Boy Teşkilât-Destanları*, İkinci Baskı, Ankara.

Togan, Zeki Velidi (1972) *Oğuz Destanı Reşideddin Oğuznâmesi*, İstanbul, 1972.

Uzunçarşılı, İsmail Hakkı (1927) *Tôqâd, Nîksâr, Zîle, Tûrhâl, Pâzâr, Âmâsya vilâyet, qazâ ve nâhiye merkezlerindeki Kitâbeler*, İstânbûl.

Wittek, Paul (1950) Notes sur la Tughra Ottomane (II), *Byzantion* XX, 267-93.

Wittek, Paul (1952) Yazïjïoghlu 'Alī on the Christian Turks of the Dobruja, *BSOAS* XIV, 639-68.

Ащурбейли, Сара (1983) *Государство Ширваншахов* (*VI-XVI* вв.), Баку.

Бретаницкий, Л. (1965) *Баку Архитектурно-художественные Памятники*, Москва.

井谷鋼造（1985）イルハン国とルーム『イスラム世界』23・24，34-54.

井谷鋼造（2000）トゥルク民族とイスラーム —— アイデンティティの観点から —— 追手門学院大学アジア文化研究会編『多文化を受容するアジア』和泉書院 263-79.

井谷鋼造（2005A）トルコ共和国イスタンブル市内にあるファーティフ・スルターン・ムハンマド時代のふたつの碑文『アジア文化学科年報』（追手門学院大学文学部）8，15-25.

井谷鋼造（2005B）トルコ共和国ニイデ市内にある西暦 13-15 世紀のアラビア文字碑文『追手門学院大学文学部紀要』41，1-24.

井谷鋼造（2007）トルコ共和国アマスヤ市内にある西暦13-15世紀のアラビア文字碑文『追手門学院大学文学部紀要』42，1-24.

井谷鋼造（2008A）トルコ共和国イズニク市内にある西暦14-15世紀のアラビア文字碑板『追手門学院大学国際教養学部紀要』1，47-68.

井谷鋼造（2008B）歴史的なモニュメントの碑刻銘文資料が語るもの ―― 西暦12-15世紀アナトリアの場合 ――『史林』91-1，101-40.

井谷鋼造（2009）オスマーン帝国のモニュメントに残された刻銘文資料の語るもの ―― 西暦15-17世紀 ――『追手門学院大学国際教養学部紀要』2，1-27.

井谷鋼造（2010）トルコ共和国エディルネ市内にある西暦15世紀のアラビア語石板銘文について『追手門学院大学国際教養学部紀要』3，23-48.

井谷鋼造（2011）トルコ共和国でのアラビア文字刻銘文資料調査補遺（1）『アジア史学論集』4，43-65.

稲葉　穣（1995）アラブ・ムスリムの東方進出　堀川徹編『世界に広がるイスラーム』（講座イスラーム世界3）栄光教育文化研究所，82-124.

宇野伸浩（2002）『集史』の構成における「オグズ・カン説話」の意味『東洋史研究』61-1，34-61.

梅村　坦（1999）草原とオアシスの世界『中華の分裂と再生』（岩波講座世界歴史9）85-107.

榎　一雄（1951）エフタル民族の起源『和田博士還暦記念東洋史論叢』講談社，133-150.

勝藤　猛（1976）『統治の書』について『東洋史研究』34-4，58-80.

杉山正明・北川誠一（1997A）『大モンゴルの時代』（世界の歴史9）中央公論社.

杉山正明（1997B）『遊牧民から見た世界史　民族も国境もこえて』日本経済新聞社.

内藤みどり（1988）『西突厥史の研究』早稲田大学出版部.

本田実信・小山皓一郎（1973）オグズ=カガン説話1『北方文化研究』7，19-63.

間野英二（1992）カーシュガリー『トルコ語辞典』に見える農業関係の語彙『藤本勝次　加藤一朗両先生古稀記念　中近東文化史論叢』1-23.

吉田　豊（1988）カラバルガスン碑文のソグド語版について『西南アジア研究』28，24-52.

吉田　豊（2011）ソグド人とソグドの歴史　曽布川寛・吉田豊編『ソグド人の美術と言語』臨川書店，8-78.

（京都大学大学院文学研究科）